

天地創造

——基礎としての創世記(その2)



安息日午後 5月23日

今週のテーマ

暗唱聖句

もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。(詩篇 19:1、口語訳)

天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。(詩編 19:2、新共同訳)

今週の聖句

ヨブ 26:7～10、創世記 1章、2章、5章、11章、歴代誌上 1:18～27、
マタイ 19:4、5、ヨハネ 1:1～3

多くの偉大な思想家は、神が創造された世界を探求するうえで聖書に触発され、結果として、現代科学が生まれました。ヨハネス・ケプラー、アイザック・ニュートン、ジョン・レイ、ロバート・ボイルほか、初期の偉大な科学者たちは、彼らの研究が神の御手によって創られたものを一層明らかにしたと考えていました。

しかしフランス革命後、19世紀の科学は、有神論的世界観から自然主義や物質主義に基礎を置いた世界観へ、しばしば超自然なことを受け入れない世界観へ向かい始めたのです。このような哲学的考えは、チャールズ・ダーウィンの『種の起源』(1859年)によって一般に普及しました。その時以来、科学は聖書的な基礎からますます遠ざかり、結果として、創世記の物語が根本的に再解釈されることになりました。

聖書は、時代遅れの非科学的な宇宙観を教えているのでしょうか。聖書の物語は、周辺の異教の国々から単に借用したものなのでしょうか。聖書は、文化的に〔それが書かれた〕場所や時代によって条件づけられているのでしょうか。それとも、靈感を受けているその性質は、神の枠組みの中で完全である起源観へと私たちを引き上げるのでしょうか。

古代世界の多くの人々は地球が平らだと考えていた、と一般的に信じられています。しかし、さまざまなそれなりの理由によって、たいいていの人々は地球が丸いということを理解していました。ところが今日に至るまで、聖書そのものが地球は平らだと教えていた、と主張する人たちがいるのです。

問1 黙示録7：1、20：7、8を読んでください。これらの聖句の文脈はどのようなものですか。さらに重要なことに、これらの聖句は、地球が平らだと教えていますか。

これらの聖句の記者であるヨハネは、終わりの時代の預言について書いており、「大地の四隅に四人の天使が立っているのを見た。彼らは、大地の四隅から吹く風をしっかりと押さえて……いた」（黙7：1）と描写しています。彼は「四」という言葉を三度繰り返し、天使たちと四つの方角を結びつけています。

要するに、彼は比喩的表現を用いているにすぎません。それは例えば、私たちが今日、「太陽が沈んでいく」とか、「風が東からふいてきた」と言うのと同じです。文脈が、東西南北は比喩的な考えであると示唆しているときに、これらの預言的聖句を文字どおりに解釈することを主張するならば、それは、これらの聖句を文脈から抜き出して、それらが教えていないことを教えさせることとなります。つまり、イエスが「悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出て来るからである」（マタ15：19）と言われたとき、彼は人間の生理学について話していたのでも、文字どおりの人の心について話していたのでもありません。彼は道徳的な強調をするために、比喩表現を使っておられたのです。

問2 ヨブ記26：7～10、イザヤ40：21、22を読んでください。地球の性質について、これらの聖句はどのようなことを教えていますか。

ヨブ26：7では、地球が宇宙の中に浮遊しているように描かれています——「神は聖なる山を^{ぼうぼく}茫漠としたさかいに横たわせ／大地を空虚の上につるされた」。地球は「円」（ヨブ26：10）、つまり球体です。イザヤ40：22は、「主は地を覆う大空の上にある御座に着かれる。地に住む者は虫けらに等しい。主は天をバールのように広げ（られる）」と述べています。

考古学者たちはこれまで、創造や洪水といった太古の歴史を含む古代エジプトや中東の文章を発見してきました。そのためにある人たちは、創世記の物語はこのような文化からの借り物なのだろうかとか、何らかの形でそれらに基づいているのだろうかとか、疑問に思っています。しかし、そのようなことが本当にあるのでしょうか。

問3 創世記1:1~2:4を読んだのち、『アトラ・ハシース叙事詩』からの次の引用文を読んでください。「神々が人間の代わりに働き、荷を担いでいた頃、神々の荷はあまりにも重く、その働きはあまりにも過酷で、困り果てていた。……出産の女神に子孫を造らせよう、そして神々の荷を人間に背負わせよう！……知恵の神ゲシュトゥーエを、彼らは集会で虐殺した。（出産の神）ニントゥは粘土に、彼（ゲシュトゥーエ）の肉と血を混ぜた……」（ステファニー・ダリー『メソポタミアの神話——天地創造、洪水、ギルガメシュほか』9、14、15 ページ、英文）。あなたはどのような違いを見いだすことができますか。

二つの物語の間に類似点はありますが（例えば、最初の間が土から造られたこと）、違いのほうはずっとはっきりしています。

★1 『アトラ・ハシース叙事詩』では、神々が休息できるように、人間が神々のために働きます。創世記では、神は地球とその中のすべてのものを、被造物の頂点である人間のために創造し、人間と一緒に休息なさいます。創世記では、人間は園の中に置かれ、神と交わり、神が創造されたものの世話をするように招かれます。そのような考えは、『アトラ・ハシース叙事詩』には見当たりません。

★2 『アトラ・ハシース叙事詩』では、あまり重要でない神が殺され、彼の血が粘土と混ぜられて7人の男女を造り出します。創世記では、初めのアダムは神によって心を込めて「形づくられ」、神が彼に命の息を吹き入れてくださり、女はアダムを「助ける者」としてあとから造られます。神は、殺害された〔神話の中の〕神の血でアダムとエバを造ったりなさいませんでした。

★3 『アトラ・ハシース叙事詩』の中に見られるような対立や暴力の兆しは、創世記の物語の中にはありません。

聖書の物語は、完全な世界で人間に品位ある目的をお与えになる全能の神を高尚に描いています。学者たちはこの根本的な違いのために、結局、これらの創造物語はまったく異なるものであると結論づけています。

創世記は古代の異教の創造神話に基づくどころか、そういった神話に異を唱え、創造主なる神をそれらから遠ざける形で書かれたように見えます。

問4 創世記1：14～19を読んでください。第四の日に登場したものは、どのように描かれていますか。それらの機能はどのようなものですか。

「太陽」や「月」という言葉の使用が確実に避けられています。それは、ヘブライ語でそれらの名前が、古代中近東やエジプトの太陽の神や月の神の名前（あるいは、それに近い名前）だったからです。「大きな光る物」「小さな光る物」という言葉の使い方は、それらが特定の機能のために創造されたことを示していました。その機能とは、「季節のしるし、日や年のしるし」（創1：14）となり、「地を照ら（す）」（同1：15）ことでした。つまりこの聖句は、太陽と月が神々ではなく、今日、私たちが理解しているように、特定の自然の機能を持つ、創造された物体であることをはっきり示しているのです。

問5 創世記2：7、18～24を読んでください。神は、アダムとエバの創造にいかに関心を込めて関わられましたか。

古代中近東の神話はどれもみな、あとから思いついたこととして人間の創造を描いています。それは、神々を重労働から解放しようという試みの結果でした。このような神話の考えは、人間が神の補佐役としてこの世を支配するという聖書の考えによって否定されます。〔聖書の〕人間の創造には、あとから考えたことは何もありませんでした。それどころか、聖句は、創造物語の頂点として人間を指摘しており、異教の物語と聖書の物語がいかに異なるかを一層はっきりと示しています。

このように創世記は、古代世界の神話を矯正しているのです。モーセは異教の概念に置き換えられない言葉や考えを用いました。しかも彼がそうしたのは、天地創造の現実や、天地創造における神の役割と目的に対する聖書の理解を単純に表現することによってでした。

数千年前、聖書の創造物語は、一般的な文化とは相容れませんでした。今日でも、聖書の創造物語は、一般的な文化とは相容れません。私たちはなぜ驚くべきではないのですか。

問6 創世記5章と11章を読んでください。アダムからノアまで、さらにノアからアブラハムまで、聖書は人類の歴史をどのようにたどっていますか。

一つの要素があるために、これらの系図は聖書の中で特別なものになっています。そこには時間という要素が含まれているのです。そのため、学者の中には、これらの系図を「年代系図」と正確に呼ぶ人もいます。これらの系図は、期間を伴う子孫の情報を連結する構造になっており、「Aは〇〇歳になったとき、Bをもうけた。Aは、Bが生まれたのち□□年生きて、息子や娘をもうけた」と記されています。創世記5章では、「Aは△△年生き、そして死んだ」という定型句が加えられています。この連結構造は、ある世代を削除したり、加えたりすることを妨げたことでしょうか。創世記5章と11章には、一連の子孫が途切れることなく記されており、歴代誌上1:18~27によって裏づけられるとおり、そこには加えられたり、削られたりした世代がありません。このように、聖書は聖書そのものを解釈するのです。

ほぼ2000年間、ユダヤ教とキリスト教の解説者たちは、これらの聖句が歴史をあらわしており、(少なくとも、創世記1章と2章で描かれている天地創造の7日間からの)大洪水の年代や地球の年齢を決定する正確な方法を示していると解釈してきました。

しかしここ数十年、創世記5章と11章を再解釈して、より長い年代に合わせようという試みがなされてきました。いくつかの考古学的、歴史学的データが、より長い年代を示唆していると解釈されているからです。これは、聖書の記録の信頼性に関して、深刻な問題を引き起こしています。

しかし、もし私たちが神の時間概念や、歴史における時間の進み方に対する神の概念を理解したいのであれば、私たちは次のことを認めなければなりません。これら二つの章は、「いずれも歴史的かつ神学的であり、時間と空間の広がりという領域において、アダムをそのほかの人類と結びつけ、神を人間と結びつけている。創世記5章と11章10~26節は、この惑星の6日間の創造の出来事における山場として神が創造された人間と、神の民とを結びつける時間の枠組みと人間の鎖を与えているのだ」(「創世記5章と11章の年代系図の意味」雑誌『起源』1980年第7巻2号69ページ、英文)。

旧約聖書のこれらの聖句は、重要な理由があって存在していますが、パウロは1テモテ1:4とテトス3:9において、私たちが先のような聖句について論じるときに留意すべきどのようなことを言っていますか。

問7 次の聖句を読み、これらの記者がそれぞれ、創世記1章から11章のなんの話題に言及しているかを記してください。

- マタイ 19：4、5 _____
マルコ 10：6～9 _____
ルカ 11：50、51 _____
ヨハネ 1：1～3 _____
使徒言行録 14：15 _____
ローマ 1：20 _____
IIコリント 4：6 _____
エフェソ 3：9 _____
Iテモテ 2：12～15 _____
ヤコブ 3：9 _____
Iペトロ 3：20 _____
ユダ 11、14 _____
黙示録 2：7、3：14、22：2、3 _____

イエスと新約聖書のすべての記者が、信頼できる歴史として創世記1章から11章に言及しています。イエスは、モーセが書いたものと男女の創造に言及しておられます（マタ 19：4）。パウロは、書簡の中で強調したい神学的ポイントを立証するために創造物語を繰り返し用いています。彼はアテネの教養ある人々に向かって、「世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません」（使徒 17：24）と断言しました。このように、新約聖書の記者たちは、基礎となる創世記の性質を足掛かりとして、この文字どおりの出来事の重要性を現代の読者に示しています。

例えば、ローマ5章を読んでください。パウロは何度も、アダムからイエスへ直接結びつけています（ロマ 5：12、14～19 参照）。つまり、歴史上のアダムが文字どおり実在したとみているのであり、聖句を文字どおりに読むことが、起源に関する進化論的モデルに置き換わるとき、その立場は致命的に損なわれます。

もし聖霊に導かれた新約聖書の記者たちやイエスご自身が創造物語を信頼できる歴史とみなしたのであれば、（墮落した、誤りを犯しがちな人間の主張に基づいて）私たちが同じようにしないことは、なぜ愚かしいのですか。

「聖書は、人間が持っている最も包括的で、最も有益な歴史である。それは永遠の真理の泉から直接生まれたものであり、いつの時代にも、神の手がその純粹さを守ってきた。……私たちはここにおいてのみ、人間の偏見や高慢によって汚されていない人類の歴史を見いだすことができるのである」(『教会への証』第5巻25ページ、英文)。

「私は、聖書の歴史なくして、地質学は何も証明できないことを示された。地中の遺物は、多くの点において現在とは異なる状況を証言している。しかし、それらが存在していた時代や、それらがどれほど長い間地中にあったのかは、聖書の歴史によってのみ理解されるべきである。もし私たちの推測が神聖な聖書の中に見いだされる事実と矛盾しないなら、聖書の歴史を超えて推測することは無害かもしれない。しかし、創造の歴史に関して、人が神の言葉から離れ、自然の法則に基づいて神の創造の業を説明しようとするなら、彼らは不確かさという広大な海の上にいるのである。神は、文字どおりの6日間でどのように創造の業を成し遂げられたのかを、死すべき人間たちに明らかにしてこられなかった。神の創造の業は、神の存在と同様、理解できないのである」(『靈的な賜物』第3巻93ページ、英文)。

話し合いのための質問

- ① 現実(手で触れ、耳で聞き、目で見、試験・再試験のできるもの)に関する科学的説明でさえ議論や論争であふれているのに、なぜこれほど多くの人が、何百万年、何十億年も前に起こったと推定される出来事に関する科学的発表を、疑いもせずに受け入れてしまうのですか。
- ② 現代科学は、自然の事象を説明するのに超自然の手段を用いることはできないという(一見したところ合理的な)前提に基づいています。つまり、例えば、魔女が土地に呪いをかけたからだと主張することで飢饉を説明しようとすることはできません。しかし、創世記に描かれている創造物語に関しては、どういうところがこの説明方法の限界なのでしょう。言い換えれば、創世記の物語は、純粹に超自然の出来事でした。しかし、もし創造の手段として超自然的なことを機械的に排除してしまうなら、必要に迫られて、あなたが思いつくほかのモデルは、なぜいづれも間違っただけになるのでしょうか。